

## 独り善がりの意志の力

これは最近の地方紙に掲載されていた、文芸評論家の斎藤美奈子さんの見出しのタイトルです。安倍首相の所信表明を受けてのものです。以下にその要旨を記載します。

15日に招集された臨時国会の所信表明演説で、安倍首相は「意志の力」というフレーズを4回使った。うち2回はパラリンピックで15個の金メダルを獲得した水泳の成田選手をたたえた言葉。あとの2回は「強い日本を目指せ」というメッセージのためだった。

①「明治人たちの『意志の力』に学び、前に進んでいくしかない」「要は、その『意志』があるか、ないか。『強い日本』。それをつくるのは、ほかの誰でもありません。私たち自身です」②「今の日本が直面している数々の課題」「これらも『意志の力』さえあれば、必ず乗り越えることができる。私はそう確信しています」これを評した各地方紙の社説の見出しには「独り善がりが目に余る」「精神論だけでは打開しない」等であるが、斎藤氏によれば批判の仕方がまっとうすぎるそうである。本人は「意志の力」と聞き、腹を抱えて絶倒した。ある作品のことを思い出したからであると続く。

## 戦時下の要請

佐藤哲也「沢蟹まけると意志の力」は1996年の小説である（残念ながら現在は絶版）。主人公の沢蟹まけるは「意志の力」で卵の中にいる間に人間の姿になった蟹の子だ。そんな奇想天外な設定で始まるこのナンセンス小説は、表題からもわかる通り、じつは全編これ「意志の力」を解説し、批評し、揶揄しまくった小説なのである。・・・誌面の関係でエピソードまでは取り上げられませんが、「戦時下においてこそ意志の力に対する要請が大きくなる。」つまり「意志の力」は理不尽な命令の代名詞であると結論づけている。

## 可能と断言

「意志の力」と聞いて、世界中の人々が連想するのは、1934年ナチ党全国大会の記録映画「意志の勝利」だろう。16日の代表質問で、民主党の海江田代表が「思い出したのは『意志の力』を好んで使った独裁者のこと」と指摘したのは当然といえる。現にヒトラー自身も言っている。「兵器は錆び、隊形は時代遅れになる。だが意志だけはこの両者を何度でも復活させることができる」（平野一郎訳、続・わが闘争）

戦時下の政府のパロディーみたいな安倍政権。麻生財務省がいう「ナチスの手口」は政権の「意志」なのかも。安倍首相は「意志の力」で特定秘密保護法案を通し、集団的自衛権の行使に踏み切り、いずれは「意志の力」で改憲を成し遂げるつもりなのであろう。東京五輪を勝ち取ったのも「意志の力」。福島第一原発の汚染水も「意志の力」さえあればコントロールできると信じているに違いない。

「沢蟹まける・・・」は言う。「意志の力とは不可能を可能にする力ではない。不可能なことを可能だと断言する力である」「意志の力」の日本的な表現が「進め一億火の玉だ」であり「欲しがりません勝つまでは」であろう。挙国一致を求めた戦時下の「国民精神総動員運動」を思い出す。

一時の勢いに飲み込まれないように、大いに警戒しなければなりません。